

## 外部検討委員会 部会の開催結果

## 1 大規模農場における I C T の利用と将来の展望

○開催日：10月11日（木）

○講師：株式会社 穂海 代表取締役 丸田 洋 氏

## ○事例紹介

- ・ 今後は、担い手の減少に伴い経営の大規模化が進むため、I C T等先端技術の利用は拡大。
- ・ 穂海では、I C Tによる生産管理システム導入により、効率的な栽培計画、作業計画の立案や、原因（作業）と結果（収量）の明確化に活用。
- ・ これにより、全員新規就業者である従業員15名により145ヘクタールの栽培・作業管理を実現。
- ・ 再基盤整備により、1ヘクタール以上のほ場になれば、無人トラクターやドローンの活用も検討。
- ・ ほ場形態に合わせたI C Tの開発・導入が必要。そのため基盤整備は不可欠。
- ・ 農業者への導入のインセンティブをいかに高められるかも普及のカギ。

## ○意見交換

- ・ 農林水産事務所と「拠点」が連携することで、現場ニーズの迅速な把握が可能となり、現地の課題解決に必要な試験研究が行える。現地と試験研究をつなぐ機能の強化が必要ではないか。
- ・ 瀬戸内側と中山間、それぞれの地域に合わせた、基盤整備や先端技術の導入が必要。
- ・ 生産全般に関する複合的な機能を持つソフトウェア開発が必要。

## 2 スマート農業等の先端技術の研究開発動向や企業連携の状況

○開催日：10月12日（金）

○講師：農業・食品産業技術総合研究機構 企画調整部長 中島 隆 氏

### ○事例紹介

- ・ 先端技術の開発・導入には、大学、研究機関、民間、生産現場がそれぞれ役割を担いながら、基礎から実証、実用化まで連携した取組が重要。
- ・ 農研機構では基礎から実用化までの各段階すべてのデータを自動的に集積し、これをAIで解析し、フィードバックする「農業データ連携基盤」を整備中。
- ・ 大規模な現場では、先端技術を活用して匠の技の見える化を図り、熟練者以上の精度とスピードで農作業を可能とする技術や、条件不利地域では、アシストスーツや、ドローンを活用した農薬散布等の技術を開発中。
- ・ 先端技術を生産から出荷まで体系的に組み立て、これを一気通貫で実証するとともに、現場ニーズに照らして評価した上で、速やかに普及させることが重要。

### ○意見交換

- ・ 先端技術の導入に際しては、現場の実情に照らして、必要な機能のみを備えた機械の開発が必要であり、これにより機械の低廉化も可能。
- ・ 先端技術の導入には価格面でハードルが高いので、現場実証支援のような行政のサポートにより、まずは普及を促進することが必要。
- ・ 地上レーザー測量等により森林資源の量を把握することが可能となったが、一方で、匠の技を提供する者の知的所有権の保護や、森林経営の情報保護など制度面での対策が必要。